

郷土のために

災害を防ぐため、被害を少しでも軽減するために、人々は知恵を出して努力してきました。四国各地の先人の行いをご紹介します。

■先覚者の名を讃える千田堤（香川県三豊市）

江戸時代、財田川では度重なる洪水が樋盥（ひだらい）橋下流の大野の田畑を流失させていました。それを防ぐため、地元出身の丸亀藩士・千田数馬興義は、地域の人々とともに、樋盥橋から祇園橋のたもとまで長さ 600m、幅 6.3m、高さ 1.3m の堤防を築きました。築造は寛文年間の 1670 年頃と推定されています。この堤防は独自に工夫されたもので、土を使わず、両岸を大きな石で築き、内部は砂や礫をつめて固めてありました。大水が出ると、水の勢いを徐々にやわらげ、堤防は壊れない構造でした。その名に偉業が讃えられた千田堤は、現在、ふれあい公園に復元されています。（「新修山本町誌」2005 年）

■島の人々を救った甘藷（愛媛県今治市）

享保 17 年（1732）、伊予国は長雨、うんかの発生などにより飢饉に見舞われ、松山藩が幕府に報告した餓死者数は三千数百人に達し、藩主が幕府から謹慎を命じられるほどでした。この時、大三島など芸予諸島では餓死者が出なかったと伝えられています。これは、その 20 年ほど前、大三島の瀬戸の下見（あさみ）吉十郎が正徳元年（1711）巡礼の旅に出た折に、甘藷の栽培が大三島などに適していることを知り、薩摩の禁制を犯して密かに甘藷を持ち帰り、その栽培を郷里に広めたためでした。今治市上浦町の向雲寺には、吉十郎の功績を讃えて芋地蔵がまつられています。（「上浦町誌」1974 年）

■水争いから甫喜ヶ峯疏水へ（高知県香美市、南国市）

明治 26 年（1893）、新改川沿いは干ばつに見舞われました。これまでの度重なる水争いに疲れていた地域の人々は雨乞い祈願を行い、この時に甫喜ヶ峰（ほきがみね）疏水計画が持ち上がりました。甫喜ヶ峰にトンネルを掘り、穴内川の水を引くというものです。翌年の干ばつ時にもまた水争いが起こりましたが、新改村や久礼田村の村長などが協力して、高知県庁にも請願して計画を進めました。明治 29 年に開始された工事中には、トンネル内部で酸素不足になるなどの事態も起こりましたが、唐（とう）みを並べて風を送るなど工夫して工事を進め、長さ 1,050m、幅 1m80cm の疏水は明治 33 年に完成しました。香美市土佐山田町に甫喜ヶ峰疏水記念碑が建立されています。（「土佐山田町史」1979 年）

■次善の策としての水防竹林（徳島県東みよし町）

明治 32 年（1899）7 月の暴風雨により、吉野川が氾濫し、三庄村と加茂村では民家 11 戸が流失し、田畑数十町歩が河原となる被害が発生しました。三庄村長の国安邦太郎は、堤防の築造を関係当局に繰り返し陳情しましたが、実現が不可能だと分かると、村内の有志と相談を重ね、次善の策として水防竹林を造成することにしました。住民の寄付と勤労奉仕により、明治 34 年に竹の植え付けを開始し、延長約 820m、幅 18m の水防竹林が完了したのは 6 年後の明治 40 年でした。西庄の八柱神社境内と中庄の公民館前に水防林之碑が建てられています。（「吉野川百年史」1993 年）

困難に遭っても、事を前に進める。その原動力の一つは、生まれ育った郷土を何とかしたいという思いだったのだろうと思います。